

彙報

昭和十六年度史學科 卒業論文題目

國史專攻

元治の變を中心とし加賀藩勤王志士の動向及び藩の態度

室町時代の末期に於ける庶民の社會生活 厚見良夫

幕末變革期に於ける民心の動搖 荒尾利就

近世後期に於ける自然科學的思想 井狩忠之

日本刀史と日本文化史 池田正一

室町時代文化の一考察 岩尾常幸

封建制度と町人 大石良村

古今著聞集と時代の思想(中世の談話集と時代の思想) 龜田雅也

中世佛教に於ける戒律思想 菅田慶介

近世國學の先驅 野口司

歐人來航に伴ふ世界的精神の展開 服部貞藏

日本國家と武家社會 水野優三

平田學派 南原五郎

幕末に於ける日本人間發展の一問題に就いて 美根道廣

飛鳥寧樂時代佛教彫塑の研究 毛利久

寺院志、民俗志、文藝志、災害騒動志、人物志、年表等の諸志を
收め、下巻は史料として本文に關係ある各種の文獻を蒐めてあ
る。通計二千四百餘頁、吉田敬市、近松文三郎等多數編纂員の協
力になるは勿論であるが、全編の體例とその大部分の記述は編纂
主任福尾猛市郎氏の手になつたものといふ。地方史として要求さ
れる多方面の要望に應へんがため、その叙述も自ら一様ではない
が、編者の特に力を用ひられたのは、古代にあつては條里制と郷
との關係や、莊園制の中に於ける神社(神職)の地位の問題であ
り、近世にあつては城下町の經營、惣年寄、年寄等による町の自
治、商工業の株仲間組織とその變遷、金融等の問題であつたか
と思はれる。中巻の志表は多くは町の現勢に關するものである
が、それらの中にあつても町割の制度や古い水道等に關する記事
はわれ／＼にとつても特に興味深いものがある。
思ふに地方史の編纂は、編纂その事が既に勞苦多い仕事である
ばかりでなく、外的にも種々なる支障や困難の伴ふものである。
本書にあつてもその編纂始末を見ればその計畫が如何に古くより
あり、而して如何に多くの支障によつてその完成を妨げられてゐ
たかを知ることが出来る。然も福尾氏が一度その困難なる事業を
托せられるや、比較的短日月にしてよくその功を竣へ、紀元二千六
百年の輝かしき年に於いて美事その完成を告げられたことは海に
敬服に堪へないところである。(菊判三冊、昭和十四年十二月——
十五年五月刊、滋賀縣蒲生郡八幡町役場發行、非賣品)(柴田實)

東洋史專攻

唐代贖刑制度管見

北宋士大夫文化の一考察

陽明學に於ける人間概念自我意識の展開と其意義

高麗の土地制度と社會

清初の旗地について

南北朝末期の佛道二教の一考察

西洋史專攻

英國重商主義の成立とその權造

原始基督教成立の精神的一考察

ヘルデルと歴史

Friedrich 大玉と Machiavellismus.

英國毛織物工業の發展に就て

ルネッサンスの時期概念

佛蘭西舊政治 Ancien Regime に於ける官職賣買に關する

一般的考察

地理學專攻

猶太民族の地理學的考察

日本沿岸に於ける社會的地縁(主として海村を中心として見たる)

朝鮮米の地理學的研究

礪波平野の人文地理學考察

泰國の交通權造(日本地政學の立場より)

考古學專攻

西域の美術考古學に關する一考察

昭和十六年度史學科講義題目

正科目

國史

普 通

特 殊

普 通

特 殊

普 通

特 殊

普 通

特 殊

普 通

特 殊

普 通

特 殊

普 通

特 殊

普 通

特 殊

藤野義明

鹽田義秋

木村正大

佐野正也

島田虔次

田代善信

木石獨芳

若山輝正

上之親夫

小田丙午郎

兼岩正夫

加畑一夫

關 亨

富本健輔

山口 收

岡本信太郎

中田榮一

西山和夫

林 宏

普 通

特 殊

普 通

特 殊

梅原教授	殷代の文物	二	普	通原教授	史學研究法	一
宮崎助教	水滸傳に現れたる支那の近世社會狀態	二	普	地理學		
田村助教	遠代の社會と文化	二	普	小牧教授	地理學通論(第一部)	二
石濱講師	歐洲人の西伯利亞研究史	二	普	野滿教授	地理學通論(第二部)	二
鴛淵講師	明末蒙古部族考 (四〇)	二	特	小牧教授	日本地政學	二
杉本講師	安南と日本との關係 (二五)	二	特	小野講師	アメリカ地誌	二〇〇
田村助教	二十二史劄記講讀	二	講	室賀講師	政治地理	二
習那波教授	東洋史の諸問題	二	講	室賀講師	獨逸地理書講讀	二〇〇
西洋史			讀	小野講師	佛蘭西地理書講讀	二〇〇
通原教授	西洋史概説(第一部)	二	演	室賀講師	佛蘭西地理書講讀	二〇〇
時野谷教授	西洋史概説(第二部)	二	演	習小教教授	地理學の諸問題	二
殊時野谷教授	獨佛戰爭に於ける歐洲の狀態	二	實	習野間講師	地理學實習	二
原教授	希臘政治思想史	一	考	古學		
井上講師	Spitanikeの研究	二	特	梅原教授	考古學概論	三
前川講師	十九世紀フランス史學	二	特	梅原教授	殷代の文物	二
讀時野谷教授	Ranke: Ueber die Epochen der Neueren Geschichte	一	講	田村助教	遠代の社會と文化	二
井上講師	A. v. Dopsch: Grundlagen der europaischen Kultur-entwicklung	一	講	東伏見講師	飛鳥奈良時代の文化	二
村田講師	希臘考古學關係英獨書講讀	二	讀	水野講師	希臘通論(第一講)	二
習時野谷教授	第十九世紀に於ける歐洲の政治的狀勢	一	演	村田講師	希臘考古學關係英獨書講讀	二
原教授	西洋史の諸問題	二	演	習梅原教授	西亞細亞考古學の諸問題	二
史學研究法			實	習梅原教授	考古學實習	二
			普	日本精神史		
			通	西山教授	日本精神史概説	二
			普	高山助教	日本政治思想	二

副 科 目

國 史	中村助教授	日本古文書學概論	(一〇)
人 類 學	赤松講師	古代神事の研究	(一〇)
教育學教授法	金關講師	人類學概論	(二〇)
美 術 史	木村教授	教育學序說	二
英 語	源 講師	日本近世繪畫史	二
獨 逸 語	中西助教授	Eliot: Literature and Religion & Other Essays	二
	Ashon 講師	未 定	二
	石川講師	高桑純夫・提婆獨逸小文典	二
		Friedrich Schneck: Kritik ans dem Spielzeugfaden	(第二回) 二
	大山講師	Thomans Mann: Tomio K. Kiefer	(第二回) 二
佛 蘭 西 語	伊吹講師	André Siegfried: Le caractère français	(第三回) 二
	市村講師	田島清編・新編佛蘭西語教科書	二
		Emile Souvestre: Journal d'un homme heureux	(第一回) 二
露 西 亞 語	十時講師	八杉貞利編 訂正増補初等露西亞語文法	(第一回) 二
		ウイソフ編 露語讀本第四册	(第一回) 二
		露字新聞	二
		エムオストロゴルスキー著 ウチエブニ	(第二回) 一
		露字新聞	二
伊 太 利 語	黒田講師	栗田、徳尾共編、新編伊	二
	Marain 講師	未 定(第二回)	二

支 那 語	倉石教授	支那語發音入門、支那語法入門、倉石中等支那語卷三卷四卷五(第二回)	(第二回) 二
		支那語卷一、卷二	二
	傳 講師	支那語讀本卷二(第三回)	二
梵 語	足利講師	梵語文法	四
希 臘 語	山中教授	Tanaka: Graecae Grammaticae Rudimenta	二
	松平講師	(第一回)	二
		Memorabilia, Xenophon: Kypoptide	(第二回) 二
		Sophokles: Kinige	一
		Oedipus (第三回)	一
羅 旬 語	山中教授	Tanaka: Nova Grammaticae Latina	(第一回) 二
	松平講師	久保編、ラテノ選文集	二
	山中教授	神田(第二回)	二
	田中教授	Plautus: Trinummus	(第三回) 一
西 班 牙 語	未 定	未 定	一

史 學 研 究 會

例 會 一月二十五日(土)午後一時半より、文學部陳列館第一教室に於いて開催、那波教授より左記の御講演があつた。お話のすゝむにつれて、多年の御苦心によつて蒐集された雅樂の唱片多數の演奏もあり、古い東洋音樂の旋律の醸し出すなごやかな雰囲気の中に、興趣深い御講演を拜聴して、數十名の會者は恍惚として没我の境地に誘ひ込まれたことであつた。

一、舞樂蘇莫遮に就いて 本學教授 那波 利貞氏
 なほ本講演の詳細は近く上梓される紀元二千六百年記念の史學論
 文集に收められてゐるのでこゝには割愛する。

讀史會

大會 昨年十二月二十一日(十七)午後一時より關西日佛學館に
 於いて村山修一氏司會の下に開催。來會者約二百名、左記諸氏の
 講演があつた。

一、開會の辭

本學助教授 藤 直幹氏

一、藤原道長と淨妙寺の建立

副手 林屋辰三郎氏

藤原道長の建立にかゝる淨妙寺は寺地在現在の京都府宇治郡宇
 治村字木幡に定められたので、寛弘二年十月の落慶以前よりその
 後引續き木幡寺とも稱へられた。この木幡の土地はかの昭宣公
 藤原基經がその地の宜しきを相して藤氏一門埋骨の處と奠めてよ
 り、通説に従へば祖父冬嗣も含めて、永く藤氏歴代の墓所として
 尊重せられたが、道長の時代には早くも佛儀も見られず法音も聞
 くを得ず荒廢に委ねらるゝに至り、やがてこの悲惨な狀況が道長
 の關心を惹くこととなつて、こゝに本寺の造營をみることとなつ
 たといふ。この建立の動機及びそれに伴ふ本寺の性質は從來堅く
 信憑せられてゐたが、この機會に於て若干の疑問の點について再
 検討を試みたのである。

第一は御堂關白記の記述を點檢すると、長保六年二月十九日の
 地定以來最初は専ら木幡三昧堂乃至彼堂と記され、やがて寛弘二

年六月頃より唐突に木幡寺乃至彼寺と稱へられるに至つたことに
 氣付くのである。此事實は建築の進展による名稱の變化といふよ
 りも、最初小規模な三昧堂建築が計畫され、後に寺院建築へと企
 劃を發展せしめられたものと解される。即ち建築進行の途上に於
 て佛塔の建立が企てられたのであつて、かゝるが故に佛塔の落成
 のみが約二年以上遅引し、また塔附廟の金物を他の廢寺より借用
 する如き醜態を演じたものと思はれる。道長の動機にして純粹で
 あるならば、好んで三昧堂より寺院へ企劃を變更する必要はなか
 つたであらう。第二に冬嗣基經の墓所は從來木幡山として決して
 疑はれなかつたが、これは延喜式制定の頃宇治郡の郡域がかつて
 は愛宕郡であつた深草山にも及んだことを無視し、式中の宇治郡
 の文字より直ちに今日の宇治郡を聯想し、やがて郡中の木幡山を
 もつてその墓所と誤認したのであり、冬嗣基經の墓所の深草山に
 存したことは他にも文獻的確證がある。また其他の歴世にも良房
 忠平・顯忠・實賴・師尹・兼通の如きは木幡山以外に葬送せられ
 た明白な史料が存するのであり、従つて必しも木幡山が藤氏一門
 埋骨の處と奠められたとは思はれないにも不拘、道長は殊更に昭
 宣公に言及しその點を幾度も力説したのであつた。

さて當時に於ける藤氏氏族内は深刻な對立抗争に終始し、道長
 も成年時代にはなほその地位の安定をみてゐなかつたのであるか
 ら、道長及びその家流が他流を排して政權を掌握するためには、
 是非とも此ら諸家流の對立から超越する存在をたあらねばならなかつ
 た。かうした事情に想ひ到り更に前述の疑問について私案する

に、彼道長が淨妙寺を自ら獨力で創建したのは、さうした政權確保の一方として氏族共同祖先の佛事供養を一身に荷負ふが如く裝ひ、かくて過去への回顧を背負ふことにより將來の發展をも荷負はんとしたものではなからうか。たとへ道長の心理についてかゝる憶測を加へずとも、太寺建立の史的意義はまさしくこの點にかゝるものではあるまいか。淨妙寺は實に道長家流の家寺（氏寺に對して）であつたと私は思ふ。この解釋の當否は今後に於ける淨妙寺の盛衰が明白に指示してくれるであらう。（林産）

後百濟國に就いて

朝鮮總督府圖書館 小倉 親雄氏

後百濟國は今より凡そ千四十餘年の往昔現在の全羅北道全州に都した新羅の裨將甄萱の建てた國であり、且甄萱は新羅の末期即ち眞聖女王代に於ける亂離の世相に乗じて、そのかみ新羅のために滅ぼされる處となつた時の百濟の義慈王の宿憤を雪がんがために後百濟國と自ら稱した事を記載される新羅叛將の一人である。然しながら此の後百濟國は甄萱の自立より僅か四十三年にして高麗太祖に滅ぼされるところとなり、正に種花一日の夢を史上に止めるに過ぎない。

然しながら後百濟國の眞の性格は、その疏本に過ぎぬ三國史記並びにこれに次ぐ後代の史書の記載・尙斯る立場を以てしては明でない。即ちその記すところは、三國史記に於ては甄萱と高麗太祖との角逐の詳であり、言はんとするところは甄萱を以て「天下之元惡大惡」なりとし、要は、何人と雖も高麗太祖に對しては、抗すべからざるものなるを言はんとするに在る。高麗史又史記の

記載を一步をも出でず、李朝成宗朝の奉命撰たる東國通鑑も結論するところは、甄萱を以て「福善禍福好還之天道」からは追るべからざるものとなすのである。加ふるに甄萱が完山（全州）に據るや、三國の遺書を輪置し、その取るゝに及んで落く灰燼と爲したとする傳説が、世に唐の李勣の平壤に於ける朝鮮古典の焚書・蘇定方の百濟征服・九角十の亂等々と共に、朝鮮に於ては「三千年來之大厄」に數へられて朝鮮典籍の佚亡と共に、此れが暴虐を想起せられるところであり、以上が朝鮮の各時代に於て扱はれる主として甄萱一個人に向けられてゐる後百濟國の姿である。

蓋し甄萱の後百濟國の眞の姿は、斯る朝鮮の文獻に見る一様の取り上げ方よりは、寧ろ甄萱の雄大なる意圖・同時に又斯るものゝ現れとしての玉都築城の壯大さと、又我が仁明天皇承和九年八月「新羅國人。一切禁斷。不_レ入_レ境內」とする靈章が嚴守せられて、所謂日鮮關係の最惡・暗黒の事態に立至つてゐた時代に在つて、新なる交隣關係の復興を熱望した事情の意味……、斯るものゝ考察の上に始めて描き出されるものがあるであらう。

後百濟國の玉都としての全州に關しては、三國史記は僅かに甄萱自らの言として「予敢_レ不_レ立_レ於_レ完山_{（州）}」の記載を残すのみにて明でない。且全州は李朝に於ては所謂濬源肇基の地・即ち李氏朝鮮祖先の地としての傳説が、太祖以來牢固たる金石文・諸記録への記載となり、此の事が又後百濟國の都としての追想を稀薄ならしめてゐると共に、近時に於ける全州府の發展が之が調査を困難ならしめる事情を申して來てゐるが、「湖南邑誌」輿地勝覽」

其の他詩文集等々に散見するものを綜合し、更に此れを甄賞と時
代を齊しくする半島風水地理思想の鼻祖としての道詭國師に擔は
されてゐる國都風水の思想との連繋に於て考察する事に依つて略
此れが大體の姿を想察し得るものがあり、想ふに南園山・僧岩山
城障祠・高達山・麒麟峯の山脈を連ぬる總延長八千餘米を此れが
古城址として考へる事は困難ではなく、その山城の一たる「高德
山城」すら尙公州の「公山城」の約二倍、實に此れが都城の壯大を
想はしめるものであり、斯る事はその後百濟國の一時占めるに至
つたその版圖即ち、余羅兩道・北は忠北慶北兩道の境界附近より、
南は慶南の普州・慶州に近き地方に及ぶ廣大なる百濟故地を併せ
る地域との連關の下に考察せらるべきものであり、尙夫れは日本
側の史料に見らるゝ甄賞の冀求する日鮮の新なる交隣關係の復舊
そのもの、眞意との連繋に於て理解されるものがあるのである。

吳越・後唐・契丹に對する遣使朝貢に關する詳細は識る由もな
いが日本に對するその深く入觀の情を存するとする事情は明らか
なものがあつた、その「伏思。當國之仰貴國也。禮敦父子。情比
孩提。唯甘扶掖。敬慕。豈憚航。深淺也。」(本朝文粹卷之十
二管新羅返譯)とすところの眞意は、即ち齊明天皇六年に百濟救援の帥を遣は
されるに至つて以來、「一千年之盟約斯渝。三百歲之生」疎。
據永(同)「じた夫れ以前の、日本と百濟との緊密なる關係に在つ
た百濟の優位なる姿を想起するものであり、此の事は更に「實有
宿心。欲奉日本國。……一日欲稱寡者。且爲奉本意」
(扶桑略記卷二十四延長)とすの甄賞の三韓統合の志願と、此れに

基づく日本の援助を冀ふ事の緊急を思ふに切なる事情を理解し得
るものであり、斯る事は即ち、後百濟國なる名稱を以て、甄賞が
その全州に自立するに當つて州民の迎勞に答へて自ら聲明したと
ころの即ち百濟の義慈王の宿憤を雲がん事を標榜するものとする
言葉に於て理解されるものがある事以上に、實に斯る關係に於て
理解される處が多いのであり、以上の如き觀點を以て始めて後百
濟の性格は略明らかな姿を顯す所があると考へられるのである。

(小倉)

大津京條坊に關する一試見 大學院學生 福尾猛市郎氏

大津京址を舊濫賀村の地に索めることは、近時反對意見の提出
さるゝものあるに拘らず、依然として適切妥當である。萬葉の歌
が荒涼たる宮址に立つて悲憤を敘べるに志賀、志賀の韓崎、志賀
の大わたなどの語が用ひられ、殊に唐崎の都の外港たるを思はせ
るのは即ち帝都の位置を暗示する。また續日本紀の宣命に大津京
の語が初現することから、同じ名稱が天智天皇の御代にも用ひら
れたであらうとの推定はたとへ正しとするも、中世及び近世の
大津の地名に限定して大津京址を搜らむとするは淺見である。古
代大津の呼名は廣大な汎稱に求めて然るべく、この佳字を都に用
ひられた御宏謨を察すべきである。

米倉二郎氏が條里制の立場より坂本にある九條、八條の字から
一條の基點を求めむとし、これを大津京の南の線と考へむとした
意圖は適切であらう。然し、氏が三二六の小字からこれを三十六
ノ坪とし、以て條の境界を定めむとしたことには若干首肯し難い

ものがある。余は大宇山と錦織との間が東西の略一直線を以て境せられ、錦織がその北に六町の幅を有して更に南滋賀と境すること、錦織が古書に錦織里として表れること等から錦織が條里の一單位を爲すものと考へる。然るとき米倉氏の推定した一條の基線はなほ一町南に下るのであつて、それは丁度柳ヶ崎を東西に延長した線に一致する。

余は更に此の基線から北、唐崎の東西線に至る間に於いて條里制に非ざる特異な區劃法の存在を發見した。右の基線以南にては湖岸より山際まで悉く方六十間の條里制なるに、基線以北は南滋賀廢寺に通ずる北國上街道を西限として、東西の幅約八十間を以て道譚を有し小字名を異にする區劃が二條存在し、これは更に方四十間を以て分たれるところの所々を残してゐる。その状態は大津電車敷設以前は現狀より明瞭に認められたもので、それは小字別地横圖の示す所である。當然條里制地域たるべき部分にかゝる特異な區劃の存在するは、これ即ち大津京條坊の痕跡を止むるに非ずやとの識見を提示する。この地域は古來大津京趾として有力視せられ、その南端は小字「御所ノ内」で徳川時代より京趾説の唱へられたところであり、その中部は南滋賀廢寺で、肥後和男氏及柴田實氏の京趾且つ梵釋寺としての可能を考定せる所であり、その北端には「宮ノ内」「蟻ノ内」あり、喜田貞吉博士等の内裏趾と想像した所である。古來京趾説の唱進せられた是等の地域にかゝる區劃の殘存せるは、右の諸説を更に新しい見地より支持するものと信ずる。

右の東西約百六十間、南北二十町に互る條坊は帝都としては狭小である。以前は條坊が湖岸にまで延びてゐたかも知れないが、さればとて喜田博士や田村氏が考定する大きな都城は地理を無視したもので、あまりにも廣大に失する。天智天皇は大津京を千古の帝都として奠め給うたのではなく、他に然るべき都地を下される留慮のあらせられたことは實紀に明かである。大津京が一時のな帝都としての御意圖に出でた趣旨と、古代の歴代選都の宮居から、大化改新の修京師の理想となり、藤原平城京に大都城の實現するまでの過程とを併せ考へれば、大津京は從來推定せられてゐた程立派な都城ではなく、條坊は上述の特異な地域に限定せられ、その中に内裏・佛殿や諸官司が含まれてゐたと見るべきではなからうか。

高野山領南部莊

本學助教 中村 直勝氏

高野山領紀伊國南部莊の事については嘗て相田二郎氏が「歴史地理」第四十六卷第二、三、四號(大正十四年九月刊)に詳細な研究を發表される所があつたが自分も此の莊園に關しては多少の關心を有して居つた事として、成るべく相田氏の研究とは重複しない方面について述べようと思ふ。

年貢がもと八百石であつたものが承久役後五百石に改められ、それは更に見米三百石色代二百石としその中の見米百石は高野山に送られたが残りの見米二百石と色代二百石とが京都に運ばれた時もあり、見米三百石すべてを高野の蓮華乘院に納めた時もあるが、それは罷取又は兵士によりて運上されて居る、とて、それ

から罷取及び兵士の性質を論じ、文書中に現はる、間職の性質にも及び且つ此の莊園の下司職が、熊野權別當權杖——澁磨——澁勝と、有名にして有力な人々に傳へられた事と鳥羽院との御關係。そして鳥羽院以下の諸上皇熊野詣と本莊との關係を求めて見ようとしたのであつた。詳しくは不日、本誌上に、纏めて發表される豫定である。

一、灘酒と江戸 日本交通文化協會 和田 篤憲氏

一、俊乘房重源像——近世封建文化の前像——

大學院學生 石田 一良氏

一、語部と記紀の成立 福井縣小濱高女 田中 勝藏氏

右三氏の講演は追て論文として發表の筈に付梗概を略す。

一、閉會の辭 本學講師 東伏見邦英氏

晚餐會 引續き午後六時より樂友會館講堂に於いて閉會。戰場

凱旋の勇士も多數交られ、一同久し振りの會合を悦びつゝ年の瀬

の一夜を送つた。

卒業論文發表會並三回生豫饗會 二月十八日(火)午後一時より

陳列館第二教室に於いて左記諸君の卒業論文發表を聴いた。

美根道廣 岩尾常幸 服部貞藏 毛利 久 水野優三

次いで午後五時半より 岡山公園鳥居に三回生豫饗會の宴を催

し、西山、藤、柴田諸先生以下先輩、學生多數出席非常な盛會であつた。

東洋史談話會

大會 十二月十二日(日) 午後一時より、樂友會館講演室に於いて開催。宮崎助教の閉會の辭に始まり、左記十一氏の研究發表があり、那波教授の閉會の辭を以て盛會裡に午後六時過ぎ終了した。引續き懇親會を開催、出席者那波教授以下三十六名。これまた近來の盛會であつた。八時過散會。

明初の安南經略に就いて 藤原利一郎

唐代に於ける内使中使その他 六花 謙哉

北宋の方田法 荒木敏一

三國時代の交州 宮川尚志

元明の史籍に見えたる拂菻 藤 枝 晃

滿文太祖老譜と太祖實錄 三田村泰助

清朝の漢人統御策に就いて 戸田茂喜

魏晉の老莊思想に就いて 村上嘉實

アジヤ北方民族に於ける白稱黑稱に就いて 駒井義明

賈耽著述考 森 鹿 三

清胡と忠義思想 安部 健夫

例會 十二月十四日(土)午後六時より樂友會館に於て開催。

出席宮崎助教以下十一名。

支那經濟史研究の回顧 大杉 正雄

興老老城行 鶴 淵 一

卒業生豫饗會例會 一月二十三日(金)午後六時より樂友會館に於て開催。晚餐の後、若山、佐野、田代、本石、島田の諸君が卒業論文の梗概、その作成の苦心談を披露した。那波教授以下出席

者

者

者

者

者

者

者

者

者

者

者非常に多く、盛會であつた。

東洋史研究會

例會 二月十九日(永)午後三時より樂友會館に於て開催。最近歸路の水野清一氏に「同蒲線南下談」を聴いた。

支那學會

例會 二月一日(土)午後一時半より樂友會館に於て開催。

元曲に於ける險韻に就いて 田中謙次
蒙古源流の七史に就いて 石濱純太郎

卒業生豫餞會 三月六日(土)午後一時より樂友會館に於て開催。卒業生韓、張、木村、木石の諸君の卒業論文要旨の發表があつた。

西洋史讀書會

例會 昭和十五年十二月十七日、午後六時より於樂友會館第五回例會を開催。原教授、井上、前川、兩講師を始め參會者二十四名。

1. Walter Goetz: Das Werden des italienischen Nationalstaats

一、ルネッサンスの本質

例會 昭和十六年二月六日、午後六時より於樂友會館。第六回例會を開催。原教授、井上、前川兩講師を始め參會者十九名。

1. J. Burchardt, Volksgeschichtliche Betrachtungen

井上 肇君

1. A. Vangs A History of Militarism 森田 隆佳君

卒業生送別豫餞會 昭和十六年三月三日、午後六時より於樂友會館開催。原教授、井上、前川、兩講師を始め參會者二十二名、食事後原教授先づ卒業生に對する餞の言葉を述べられ、卒業生互々立つて在學中の感想を述べ一同和氣鬪々の談笑裡に八時頃散會、猶會後別室で一同記念撮影を爲した。

猶會後別室で一同記念撮影を爲した。

地理學談話會

第八回大會 於樂友會館、十二月二十一日午後一時半、四八名の出席者があつて中々活潑な質問應答があつた。

一、開會の辭 室賀 信夫
一、行政區劃私見 小葉田 亮

一、埼玉縣下に於ける纖維工業の分布に就いて 村本 達郎
一、歴史地理學に於ける「空間」に就いて 渡邊 久雄

一、兵庫縣下の人口の増減 近藤 忠
一、日支交通と東支那海 吉田 敬市

一、江戸の警備と下總行徳の特許船に就いて 和田 篤憲
一、産業立地に就いて 別技 篤彦

一、政治地理の問題 宮川 善造
一、萬里長城 藤田 元春

一、閉會の辭 小牧 實繁

講演會終了後仙樂園で晚餐會を開いた。
第七回例會 一月十八日午後二時半、於實習室、出席者三十名
一、新疆の交通 三上 正利

一、支那内陸水路航行權に就いて 田中 秀作
第八回例会 二月一日樂友會館にて開催、三回生諸君の卒業論文の要旨發表、並びに藤田元春氏の講演があつた。出席者二十六名。

- 一、日本沿岸に於ける社會の地線 中田 榮一
- 一、朝鮮米の地理學的研究 西田 和夫
- 一、ユダヤ民族の地理學的考察 岡本信太郎
- 一、泰國の交通構造 藤野 義明
- 一、尺度二考 藤田 元春

(尙林宏君は病氣の爲出講なかつた)

豫饒會 例会終了後樂友會館中食堂で、心から新卒業生諸君の多幸ならん事を祈りつゝ、奉公日にふさはしい夕食をとにした。(川上記)

會 報

會 員 動 靜

入 會

- 京都市左京區一乘寺花ノ木町一三 野田方 西瀬戸 厚美氏
- 京都市左京區下鴨宮崎町四六 石田方 池田 光二氏
- 京都市左京區淨土寺眞如町二五 村河方 植村 元覺氏
- 京都市左京區北白川小倉町 自樂莊内 河野 通博氏

- 京都市左京區淨土寺南田町七四ノ八 小林 義武氏
- 京都市左京區田中東春菜町一四 西垣方 今井次男氏
- 京都市上京區小山東花池町八 三上 正利
- (以上平山紹介)

京都市左京區北白川久保田町八 合志方 田中 整治氏

轉 居

京都市左京區吉田下大路町六六 成瀬方 戸川 俊正氏

寄贈交換圖書 (三月現在)

- 郷土先儒遺著展覽會目錄 大阪府立圖書館
- 臺北帝大史學科研究年報 第六輯 臺北帝國大學文政學部
- 武藤長藏著日英交通史の研究 著 者
- 日本諸學研究 第五輯 日本文化中央聯盟
- 東方學報 東京十一ノ三 東方文化學院
- 法隆寺の壁畫 夢殿選書 鶴 故 郷 舍
- 紀元二千六百年記念開館陳列目錄 椛山郷土文化會
- 名古屋温故會繪葉書目錄 同 會
- 名古屋温故會報告 二四 同 會
- 歷史と國文學 一四四・一四五・二四六 太 洋 社
- 中國文學 六七・六八・六九 中國文學研究會
- 軍事史研究 五ノ五 軍事史學會
- 長崎談叢 二七 長崎 史談會
- 蒙古 八ノ一二 善 隣 協 會

同願月刊 七期

回教圈 五ノ一

基督敎史研究 一〇

立正史學 四ノ一三

中央文化研究會報 一一

史學雜誌 五一ノ一二、五二ノ一二

歷史地理 七七ノ一・二・三

社會經濟史學 一〇ノ九十

史苑 一三ノ四

人類學雜誌 五五ノ一二・二二、五六ノ一二

考古學雜誌 三〇ノ一二、三一ノ一二

文化 七ノ二・八ノ一・二

國學院雜誌 四七ノ一二

史迹と美術 一一ノ一二、一二ノ一二・三

社會學徒 一四ノ二・二五ノ一二

和紙研究 七

史學 一九ノ三

臺大文學 五ノ六

國民精神文化 六ノ一二、七ノ一二

民族學研究 六ノ四

東洋史研究室 六ノ一

哲學研究 二六ノ一・二

紀州文化研究 四ノ四

北京佛敎同願會

回教圈 研究所

基督敎史研究會

立正大學史學會

同 會

史 學 會

日本歷史地理學會

社會經濟史學會

立教大學史學會

東京人類學會

考古學 會

東北帝大文化會

國學院大學

史迹・美術同攻會

社會學徒社

和紙研究會

三田史學會

臺北帝大文學會

國民精神文化研究所

日本民族會

東洋史研究會

京都哲學會

紀州文化研究所